

いもうと

(原文)

平山 陽向 (12 歳)

愛知県

名古屋市立比良小学校

命は、たくさんの真心で守られている。そして、どの命も数えきれないほどたくさんの命と関わっている。ぼくがそう考えるようになったきっかけは、妹の誕生です。

ぼくが 8 歳の時、妹は産まれました。ぼくにとって、その日はとても大切に、忘れられません。

赤ちゃんは、お母さんのお腹の中で 40 週間過ごします。けれど、僕の妹はとてもせっかちで、29 週目に出てきてしまいました。1.5 リットルのペットボトル、1 本よりも軽く産まれた妹は、小さくて、自分でうまく呼吸することもできませんでした。そのため、産まれてすぐに保育器の中に入り、からだのあちこちに命をつなぐためのチューブがとりつけられました。

NICU。新生児集中治療室で過ごすことになった妹は、24 時間、たくさんの人達に守られて命をつなぎとめました。ぼくは妹が退院するまで、およそ 2 カ月間、ずっと、まだ一度も会ったことのない妹が退院する日を待ちました。お母さんとお父さんは、毎日病院に行って妹に会いました。でも、ぼくは小学生だから NICU の中には入れません。それも、妹の命を守るルールなんだと思います。

妹ができるまで、ぼくは命なんてあたりまえにあるものだと思っていました。ぼくがいま、ここにいるのもあたりまえ。でも、そうではありませんでした。

妹がまだ、お母さんのお腹にいた時、お母さんはとてもつらそうでした。大きくなったお腹をなでながら、歩くのも大変そうです。

そんな時、たくさんの見知らぬ人たちがお母さんを見て、優しく手をかしてくれていました。電車やバスに乗った時、お母さんのために席をゆずってくれた人たち。お買いものをした時、かごを商品を詰める台のところまで運んでくれたレジの人たち。食欲がない時に、食べやすいものを教えてくれた人たち。たくさんの人たちが、あたらしい命が産まれることを支えてくれていました。

妹が NICU に入院していた時も、たくさんの看護師さん、たくさんのお医者さんが守ってくれました。生まれてくることは、けっしてあたり前ではない。奇跡のようなやさしさの輪に守られて、ぼくたちは生まれて、そして笑って楽しく生きています。

妹の命があって、今、ぼくのとなりで元気に笑っている毎日があるのは、あたりまえではない。ぼくも、たくさんの人たちの真心に守られて生きています。

そして、ぼくも真心を持って、命を守っていきたいです。

それは、小さなことかもしれませんが。お医者さんや、看護師さんのように、命を救うことはぼくにはできません。

でも、つらそうにしている人に声をかけることはできます。妊婦さんや小さな子、おじいちゃんおばあちゃんや、ハンデがある人たちに声をかけて、何かできることをする。

しょんぼりしている友達、いつもと様子がちがう友達に声をかけることもできます。

それは、小さなことかもしれませんが。それでも、ぼくやたくさんの人たちの、小さなやさしさが広がれば、救える命があるかもしれない。

みんなが持っている真心が、ひろがって、つながって、やさしい輪があちこちに見える。そうなったら、みんながそれぞれ過ごしやすいくなって、みんなに活躍できる場所ができていく。いきいき笑って過ごせる社会になると思います。